

第1章

予備的考察

本章は、予備的考察である。具体的に言えば、まずは、文を考察するために、深層格、表層格、文の成分、「主題－解説」構造といった文の4つのレベルを区別する可能性と必要性を主張する。次に、中国語の文の研究でよく利用されてきた符号図示法、枠式図示法、黎錦熙の図示法を検討する。その上で、日本語構造伝達文法の基礎、すなわち構造モデルと時空モデルについて論じ、日本語構造伝達文法に基づく新しい図示法を提示する。最後に、本論文のねらいと考察対象を述べる。

1 文の4つのレベル

1つの文を考察するにあたって、まずは4つのレベルを区別することが必要である¹。以下、日本語を例として論じる。

1.1 第1レベル（深層格）

第1レベルは、(1)²に示されるように、述語としての動詞や形容詞、形容動詞の

1 これから述べようとする内容に関しては、村木（1991: 137-142, 175-176）と角田（2009: 177-239）に負うところが大きい。本章の第1レベル(深層格)、第2レベル(表層格)、第3レベル(文の成分)、第4レベル(「主題－解説」構造)は、それぞれ村木（1991）の提示した意味統語論的なレベル、形態統語論的なレベル、機能統語論的なレベル、通達統語論的なレベルにあたり、角田（2009）の提示した意味役割のレベル、格のレベル、統語機能のレベル、情報構造のレベルにあたる。

2 本書の例文は、主として《（人机通用）現代汉语动词大词典》、《汉语动词用法词典》、《HSK中国汉语水平考试词汇大纲汉语8000词词典》、《商务馆学汉语词典》、《现代汉语词典（第6版）》から引用した（一部の語句の省略を行うことがある）。ごく一部は、ほかの参考文献から引用した例文、或いは作例である。

表す事態において名詞や代名詞のさす事物が担う役割で、格文法でいう深層格のレベルである。(1)の述語動詞「食べる」の表す事態においては、名詞「花子」のさす事物が担う役割は、動作主で、名詞「パスタ」のさす事物が担う役割は、対象である。つまり、「花子」と「パスタ」の深層格は、それぞれ動作主と対象となっている。

(1)	花子が	パスタを	食べた。	
	動作主	対象		深層格

動作主、対象のほかには、状態主、着点、場所、手段、起点、相手などの深層格がある。

1.2 第2レベル（表層格）

第2レベルは、深層格を示す形式のレベルで、格文法でいう表層格のレベルである。日本語では、深層格を示す主な形式は格助詞である。(2)では、格助詞「が」が動作主という深層格を、格助詞「を」が対象という深層格を示している。このような格助詞「が」と「を」は、表層格であり、それぞれ「が格」と「を格」というふうと呼ばれている。

(2)	花子が	パスタを	食べた。	
	動作主	対象		深層格
	が格	を格		表層格

「が格」、「を格」のほかには、「に格」、「で格」、「から格」、「と格」などの表層格がある。

深層格と表層格は、一対一の関係にあるわけではない。例えば、(3a)では、動作主が「が格」によって、対象が「を格」によって示されているが、(3b)では、動作主が「に格」によって、対象が「が格」によって示されている。

(3) a	太郎が	次郎を	殴った。	
	動作主	対象		深層格
	が格	を格		表層格
b	次郎が	太郎に	殴られた。	
	対象	動作主		深層格
	が格	に格		表層格

ちなみに、深層格を示す形式には、日本語の格助詞のような後置詞のほかにラテン語や古代ギリシア語に見られる語形変化、中国語の“介詞”のような前置詞などがある。

1.3 第3レベル（文の成分）

第3レベルは、(4)に示されるような、主語、述語、修飾語など、いわゆる文の成分のレベルである。文の成分は、文を構成している語句の統語的・意味的特徴によって決まる。

(4)	花子が	パスタを	食べた。	
	動作主	対象		深層格
	が格	を格		表層格
	主語	修飾語	述語	文の成分

1.2節で述べたように、深層格と表層格は、一対一の関係にはない。深層格と文の成分も一対一の関係にはない。例えば、(5a)では、動作主となっている「太郎」が主語に、対象となっている「次郎」が修飾語になっているが、(5b)では、同じく動作主となっている「太郎」が修飾語に、対象となっている「次郎」が主語になっている。

(5) a	太郎が	次郎を	殴った。	
	動作主	対象		深層格
	が格	を格		表層格
	主語	修飾語	述語	文の成分
b	次郎が	太郎に	殴られた。	
	対象	動作主		深層格
	が格	に格		表層格
	主語	修飾語	述語	文の成分

なお、(5a)の「太郎」と(5b)の「次郎」がともに「が格」を取って主語になっているので、「が格＝主語」のような対応関係が見られそうであるが、次の(6)に示されるように、「が格」を取っている「花子」と「パスタ」は、それぞれ主語と修飾語になっている。つまり、表層格と文の成分も一対一の関係にあるわけではない。

(6)	花子が	パスタが	大好きだ。	
	状態主	対象		深層格
	が格	が格		表層格
	主語	修飾語	述語	文の成分

1.4 第4レベル（「主題－解説」構造）

第4レベルは、(7)に示されるような「主題－解説」構造のレベルである。主題は、文が何について述べるのかを示す部分であるが、解説は、主題について述べる部分である。

(7) 花子は パスタを 食べた。
 主題 解説 「主題－解説」構造

日本語では、係助詞「は」が主題を示す形式である。中国語には、一部の“语气助词” (modal particles) や前置詞、ポーズなど、主題を示す形式や方法がある。

深層格、表層格、文の成分の間には、一対一の関係が存在しないと1.2節と1.3節で述べた。(8) に示されるように、「主題－解説」構造は、深層格、表層格、文の成分のいずれとも一対一の関係にはない。

(8) a	花子は	パスタを	食べた。	
	動作主	対象		深層格
	(が格)	を格		表層格
	主語	修飾語	述語	文の成分
	主題	<u>解説</u>		「主題－解説」構造
b	パスタは	花子が	食べた。	
	対象	動作主		深層格
	(を格)	が格		表層格
	修飾語	主語	述語	文の成分
	主題	<u>解説</u>		「主題－解説」構造

以上のように、1つの文は、4つのレベルに分けて考察することが可能である。第1レベル（深層格）、第2レベル（表層格）、第3レベル（文の成分）、第4レベル（「主題－解説」構造）は、それぞれ意味、形態、統語、語用といった文の異なった面に着目しており、4つのレベルに分けることで、文をより細かく考察することができるようになる。

1.5 中国語の表層格

中国語学では、1980年代に胡裕樹、張斌、范曉らによって提唱された“三个平面理论”（「3つの平面」理論）¹ が有名である。この理論の核心は、文法を研究するにあたって、統語、意味、語用といった異なった面を区別すべきであり、また、それらを互いに結びつけるべきでもあるという観点にある。「3つの平面」理論は、1990年代に大きな展開を遂げた。現在は、いわゆる“三维语法”（3次元文法）に発展している。ただ、「3つの平面」理論、及び3次元文法は、本章で提示した第2レベル（表層格）を扱っていない。これには、次のような原因が考えられる。

すなわち、中国語学では、表層格よりも、深層格の研究が重視されている。中国語

1 詳しくは、陳（2002: 353-375）を参照されたい。

に厳密な意味での語形変化がないという事実と、表層格が語形変化を持つ屈折語の文法カテゴリーであるという観念から、孤立語の中国語には、その文法カテゴリーは、存在しないと考えている研究者が少なくないのである。

これに対して、筆者は、語形変化のみならず、後置詞、前置詞、さらには無標の形式も深層格を示すことができ、中国語には、表層格が存在しており、しかも、その表層格には、無標の形式と有標の形式があると考えられる。無標の形式は、しばしば動作主や対象の深層格を示しているが、有標の形式は、“在”や“被”のような前置詞であり、動作主や対象を含めた様々な深層格を示している。無標の形式は、ゼロ格と呼び、有標の形式は、“在”格、“被”格などと呼ぶことにする。

例えば、(9)では、無標のゼロ格は、動作主や対象を示しているが、有標の“在”格、“被”格、“把”格は、それぞれ場所、動作主、対象を示している。

(9) a	在学校，	太郎	打了	次郎。	
	場所	動作主		対象	深層格
	“在”格	ゼロ格		ゼロ格	表層格
	前置詞-学校	太郎	殴った	次郎	(学校で太郎が次郎を殴った。)
b	在学校，	次郎	被太郎	打了。	
	場所	対象	動作主		深層格
	“在”格	ゼロ格	“被”格		表層格
	前置詞-学校	次郎	前置詞-太郎	殴った	(学校で次郎が太郎に殴られた。)
c	在学校，	太郎	把次郎	打了。	
	場所	動作主	対象		深層格
	“在”格	ゼロ格	“把”格		表層格
	前置詞-学校	太郎	前置詞-次郎	殴った	(学校で太郎が次郎を殴った。)

2 中国語の文の図示法

文の4つのレベルを区別して文の研究をするにあたって、妥当で明晰な記述と説明のために、図示法を活用することができる。中国語の文に関しては、文成分分析法で使われる符号図示法、段階分析法で使われる枠式図示法、黎錦熙の図示法がよく利用されてきた。

2.1 符号図示法

“句子成分分析法”（文成分分析法）は、文の分析法の1つで、文の成分を確認することによって文の構成を分析するものである。文成分分析法で使われる図示法は多くの符号を使うので、“符号图解法”（符号図示法）と呼ばれている。例えば、(10)では、次のような図示法になっている。

二重下線 “ ” は“主語”（主語）を示す。

一重下線 “ ” は“述語”（述語）を示す、

波線 “~~~~” は“宾语”（目的語）を示す。

丸括弧 “（ ）” は“定语”（連体修飾語）を示す。

角括弧 “[]” は“状語”（連用修飾語）を示す。

突起括弧 “〈 〉” は“补語”を示す。

（“补語”は補語のこと。述語について補足説明する成分。詳しくは第4章「結果述補句」参照。）

縦二重線 “||” は主語と述語部分との境界を示す。

(10) 花子 || [每周] 吃 〈一次〉 (日式) 意大利面。
 花子 毎週 食べる 1回 和風 パスタ

（花子は週1回、和風パスタを食べる。）

研究者によって文の成分を示す符号がかなり変わることもある。例えば、劉・潘・故 (2001: 23) は、(11) に示されるように、“~~~~”で述語を、“ ”で目的語を、“〈 〉”で連用修飾語を、“[]”で補語を示している。

(11) 花子 || 〈每周〉 吃 [一次] (日式) 意大利面。

2.2 枠式図示法

“层次分析法”（段階分析法）は、“直接成分分析法”（直接構成素分析法）とも呼ばれており、2.1の文成分分析法より文の階層性を重視している。段階分析法は、文全体を2つの大きな直接構成素に分けて両者の関係を確認して、さらに、その2つの直接構成素をそれぞれまた2つの小さな直接構成素に分けて両者の関係を確認して、というふうに繰り返すことによって、文の構成を分析するものである。

例えば、(11)の“花子每周吃一次日式意大利面。”は、(12)のように、まずは、“主謂”関係を構成する直接構成素“花子”と直接構成素“每周吃一次日式意大利面”に分けている。（“主謂”関係……主語と述語部分。“主”は“主語”の略語である。“謂”は“谓语”の略語で、述語部分のことである。）

次に、“謂”の“每周吃一次日式意大利面”を“状中”関係を構成する“每周”と“吃一次日式意大利面”に分けている。（“状中”関係……連用修飾語と被修飾語。“状”は“状語”の略語である。“中”は“中心語”の略語で、連体修飾語や連用修飾語の被修飾語のことである。）

さらに、“中”の“吃一次日式意大利面”を“述宾”関係を構成する“吃一次”と“日式意大利面”に分けている。（“述宾”関係……述語と目的語。“述”は“述語”の略語で、“宾”は、“宾语”の略語である。“谓語”が“主語”の対概念であるのに対して、“述語”は“谓語”の主要部であるが、“宾语”の対概念である。）

そして、“述”の“吃一次”を“述补”関係を構成する“吃”と“一次”に分けている。（“述补”関係……述語と補語。“补”は、“补語”の略語である。）

“宾”の“日式意大利面”は“定中”関係を構成する“日式”と“意大利面”に分けている。
 (“定中”関係……連体修飾語と被修飾語。“定”は“定语”の略語である。)

(12) 花子 每周 吃 一次 日式 意大利面。



こうした図示法が、“框式图解法”（枠式図示法）と呼ばれている。

2.3 黎錦熙の図示法

中国語学において、初めて図示法を導入して文の分析を行ったのは、黎錦熙の《新著国語文法》¹である（邵 2006: 80）。黎の図示法は、図1のようなものである。

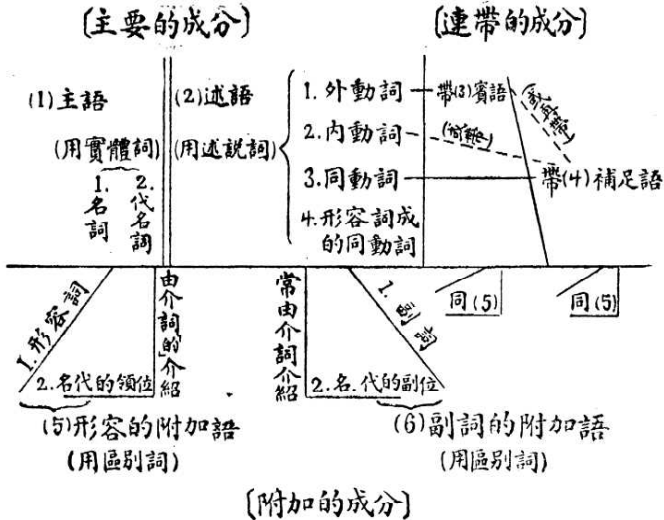


図1 黎式図示法の總体的公式（黎 1924: 27）

ここでは、具体例を通して黎の図示法を見ておく。まずは (13) である。(13) の図示は、図2ようになる。図中の“主語の形容附加語”とは、主語の連体修飾語のことであり、“賓語の形容附加語”とは、目的語の連体修飾語のことである。

1 1924年初版。1943年日本語翻訳版（題名：『黎氏支那語文法』，訳者：大阪外国語学校大陸語学研究所，出版：甲文堂書店）。

(13) 许多 强壮的 工人, 造 一座 长的 铁 桥。(黎 1924: 23)

たくさん 屈強な 労働者 建造する 1本 長い 鉄 橋

(たくさんの屈強な労働者が長い鉄橋を建造している。)

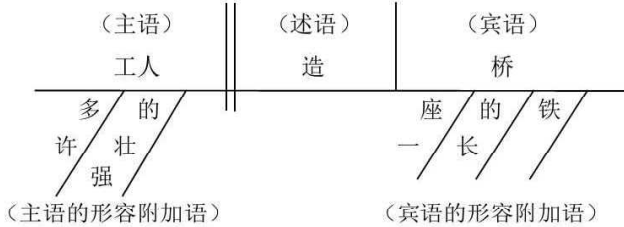


図2 黎式图示法による (13) の图示 (黎 1924: 23)

次は, (14) である。(14) の图示は, 図3のようになる。図中の“述语的副词附加语”とは, 述語の連用修飾語のことである。

(14) 工人 辛辛苦苦的 赶紧 修造 铁桥。(黎 1924: 25)

労働者 骨身を惜みず 急いで 建造する 鉄橋

(労働者が骨身を惜みず, 急いで鉄橋を建造している。)

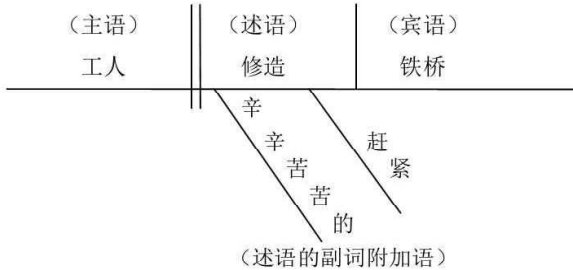


図3 黎式图示法による (14) の图示 (黎 1924: 25)

黎の图示法は, 主として文の成分を示しているが, (15) の图示 (図4) に示されるように, 文の成分のみならず, “我”と“你”の間, “多读”と“多看”と“多说”の間, “国语文”と“国音字母”と“国语会话”と“国语文法”の間の“联合”(並列) 関係を示すこともできる。

(15) 我 和 你 都 应该 多 读、多 看、而且 多 说 那些
国语文、国音字母、以及 国语会话、国语文法。(黎 1924: 226)

私 と 君 みな べきだ 多く 読む 多く 見る しかも 多く 話す それら
国文 ピンイン 及び 国語会話 国語文法

(私と君はみな, 国文, ピンイン, 国語会話, 国語会話, 及び国語文法を多く読んだり話したりしなければならない。)

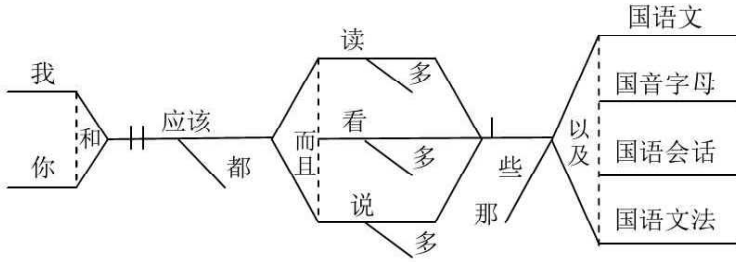


図4 黎式図示法による (15) の図示 (黎 1924: 227)

3 日本語構造伝達文法と新しい図示法

符号図示法, 枠式図示法, 黎の図示法は, 主として文の成分を示していることになるが, 文の成分のみならず, 深層格や表層格, 「主題-解説」構造を具現化する図示法が望ましい。本節では, この条件を満たすと考えられる日本語構造伝達文法に基づく新しい図示法を提示する。

3.1 日本語構造伝達文法の内容と特徴

日本語構造伝達文法は, 元杏林大学教授の今泉喜一博士が在職中に提唱したもので, 「日本語の現象を立体構造モデルと時の流れのモデルを用いて説明する, 新しい発想による(説明)文法」¹である。

今泉は, 大学院時代(1973年~1975年, 東京外国語大学)に日本語構造伝達文法を発想し, 「日本語構造文法」と題する修士学位論文を書いた。1995年3月に「日本語構造伝達文法・序論」と題する論文(1995年, 『杏林大学外国語学部紀要』第7号)を発表し, 正式に日本語構造伝達文法を提起した。

日本語構造伝達文法に関する研究成果は, 著書としても出版された。2000年1月に今泉は, 1995年から1999年に至るまでの研究をまとめ, ①『日本語構造伝達文法』と題する著書(2000年, 揺籃社, ISBN: 4897081475)を出版した。

2003年8月にその後の研究をまとめた②『日本語構造伝達文法 発展A』(2003年, 揺籃社, ISBN: 4897082056)を出版した。

2009年11月に, 「日本語態構造の研究」と題する博士学位論文を加筆・修正した③『日本語態構造の研究—日本語構造伝達文法 発展B—』(2009年, 晃洋書房, ISBN: 9784771020931)を出版した。

2014年2月に, ④『主語と時相と活用と—日本語構造伝達文法・発展C—』(2014年, 揺籃社, ISBN: 9784897083377)を出版した。

1 今泉のホームページによる。URL: <http://www012.upp.so-net.ne.jp/nikodebu/最終確認日:2015年11月6日>。

日本語構造伝達文法・発展D

最初の著書 ①『日本語構造伝達文法』は、2005年9月に改訂され、『日本語構造伝達文法 改訂05年版』(2005年, 揺籃社, ISBN:4897082285)として出版され、2012年5月に再び改訂され、『日本語構造伝達文法 改訂12年版』(2012年, 揺籃社, ISBN:9784897083117)として出版された。改訂は用語の修正等のわずかな部分にとどまっている。

表1 『改訂12年版』, 『発展A』, 『発展B』, 『発展C』の目次

①『改訂12年版』	②『発展A』	③『発展B』	④『発展C』
第I部 構造モデル	A I部 主格, を格	B I部 原因態・ 許容態	C I部 日本語構造 の基本
第II部 要素分類	A II部 テ, タ	B 1章 出来事 は4種類	C 1章 日本語の 主語
第III部 態(ヴォイス)	A III部 複文(1)条件表現 (1)	B 2章 原因態 -(s)as-	C 2章 疲れる文 (因果の複主体)
第IV部 アスペクト(局面 指示体系)	A IV部 複文(2)まえ・あと ・とき	B 3章 許容態 -e-	C 3章 同格複実 体描写
第V部 テンスとアスペク ト(時と局面)	A V部 複文(3)従文のテン スとアスペクト	B 4章 複合原 因態 -(s)as-e-	C 4章 うなぎ文 (形式断定基)
第VI部 「ある」と「いる」	A VI部 複文(4)実体修飾法 (1)	B II部 許容態の 語幹化(二段・一 段化)	C II部 日本語慣用 構造
第VII部 複主体	A VII部 諸題	B 5章 動詞二 段活用の発生と 一段化	C 6章 接続の構 造(1)(理流・論 流)
第VIII部 否定(1)時空否定	A VIII部 構造練習帳(1)	B 6章 許容態 の音声的前提	C 7章 接続の構 造(2)(接続力)
第IX部 否定(2)否定基本構 造と描写		B 7章 許容態 の発生と展開	C 8章 挨拶表現 の構造
第X部 否定(3)否定構造		B III部 態拡張に よる新動詞の発生	C III部 日本語の時 相
第XI部 否定(4)否定諸題		B 8章 動詞態 拡張24方式	C 9章 古代語の 時相
第XII部 「の」		B 9章 動詞態 拡張各方式	C 10章 日常の中 の時相(1)
第XIII部 諸題			C 11章 日常の中 の時相(2)
			C IV部 発話
			C 12章 発話構成 6要素

表1では、以上の4著書、つまり、

- ①『日本語構造伝達文法 改訂12年版』,
- ②『日本語構造伝達文法 発展A』,
- ③『日本語態構造の研究—日本語構造伝達文法 発展B—』,
- ④『主語と時相と活用と—日本語構造伝達文法・発展C—』

の目次を取り上げて日本語構造伝達文法の内容を概観している。(それぞれを『改訂12年版』, 『発展A』, 『発展B』, 『発展C』と略称した。)

『改訂12年版』, 『発展A』, 『発展B』, 『発展C』は、合計1200ページ余りである。

『改訂12年版』には、13部42章があり、『発展A』には、8部19章があり、『発展B』には、3部9章があり、『発展C』には、4部12章がある。

表1から分かるように、日本語構造伝達文法は幅広い内容を扱っている。

品詞 (第II部)

ヴォイス (第III部, B I 部, B II 部, B III 部)

アスペクト (第IV部, 第V部, AIV部, AV部, CIII部)

テンス (第V部, AIV部, AV部, CIII部)

否定 (第VIII部, 第IX部, 第X部, 第XI部)

修飾構造 (第XII部, AVI部)

格 (A I 部)

条件表現 (AIII部)

活用 (C I 部)

モダリティ (CIV部)

さらに、第XIII部, AVII部, C I 部では、数量詞、やりもらい、多義文、主語、うなぎ文なども扱っている。

日本語構造伝達文法の大きな特徴としては、次の3点が挙げられる。

- (1) 日本語構造伝達文法は、今泉が独自の言語観に基づいて唱えた斬新な文法理論であり、体系的で完成度の高い日本語文法である。
- (2) 立体的なモデルで線状性の言語の仕組みを可視的に分析している。
- (3) 切り離しては考えられないテンスとアスペクトを統合して扱っている。

次の節で日本語構造伝達文法の基礎を論じる。日本語構造伝達文法の全貌については、原著を参照されたい。

3.2 日本語構造伝達文法の基礎

日本語構造伝達文法では、構造モデルと時空モデルの2種類のモデルが設定されている。構造モデルと時空モデルは、日本語構造伝達文法の基礎となっている。

3.2.1 構造モデル

構造モデルとは、「言語表現の前提となる判断の形をモデル化したもので、ことば

の一つひとつの要素（形態素）がどのような関係で結びついているのかを示すためのモデル」である（今泉 2012:2）。構造モデルの詳細については、今泉（2012:1-102）を参照されたいが、ここで構造モデルを簡単に説明しておく。

構造モデルは、図5のような立体図、または立体図を簡略化した平面図で表示されている。

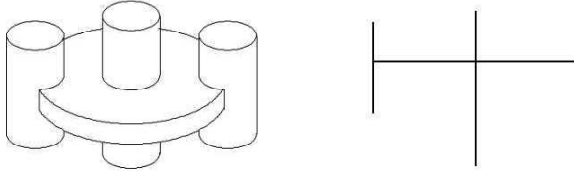


図5 構造モデルの基本（今泉 2012: 14）

構造モデル（平面図の場合）では、水平線が実体（主体）の属性を示し、水平線と十字をなして交差している垂直線がその属性の主体を示し、水平線と横倒れのT字をなして接している垂直線がその属性の客体を示している。以下、構造モデルの具体例を見ていく。

(16) 太郎がバスで学校に行った。

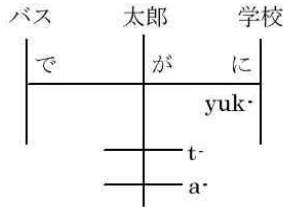


図6 (16) の構造モデル

図6は、(16) の構造モデルである。図6では、長い水平線が実体「太郎」の属性「yuk-（行く）」を示し、水平線と十字をなして交差している垂直線が主体「太郎」を示し、水平線と横倒れのT字をなして接している2本の垂直線がそれぞれ客体「バス」と「学校」を示し、水平線と垂直線との交点または接点のところに書いた「が」、「で」、「に」がそれぞれ「太郎」の深層格「動作主」、「バス」の深層格「手段」、「学校」の深層格「着点」を示している。

2本の短い水平線は、それぞれ、「t-」と「a-」の表すアスペクト的な意味を示している。「t-」は「開始後」を表し、「a-」は「存在」を表し、「t-」と結合して「完了（後）」を表しており、いずれも「行った」の「た」から分解された形態素である。このような短い水平線は、長い水平線の示す属性を補助し、アスペクトのほかにも、ヴォイス、テンス、肯否、丁寧度などの補助属性を示すものもある。

(17) 彼は図書館で本を読みました。

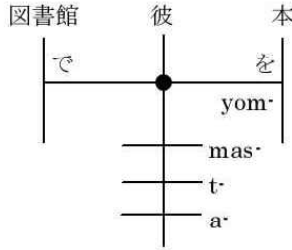


図7 (17) の構造モデル

図7は、(17)の構造モデルである。図7では、長い水平線が実体「彼」の属性「yom- (読む)」を示し、水平線と十字をなして交差している垂直線が主体「彼」を示し、水平線と横倒れのT字をなして接している2本の垂直線がそれぞれ客体「図書館」と「本」を示し、水平線と垂直線との接点のところに書いた「で」、「を」がそれぞれ「図書館」の深層格「場所」、「本」の深層格「対象」を示している。水平線と垂直線との交点についた「●」は、名詞「彼」が主題であることを示している。

3本の短い水平線は、「mas-」が丁寧度を示し、「t-」と「a-」がアスペク的な意味を示している。「mas-」は、丁寧さを表し、「t-」は、「開始後」を表し、「a-」は、「t-」と結合して「完了(後)」を表しており、いずれも「読みました」の「ました」から分解された形態素である。

また、図6と図7に示されたように、構造モデルでは、主体、客体、深層格の名称は、漢字・仮名の表記となっているが、属性、補助属性の名称は、ローマ字の表記となっている。

3.2.2 時空モデル

時空モデルは、「人間が現実の事態を理解しようとする際に行うであろう現実の再構成——諸対象の記号化と関係づけ——をモデル化したもの」であり(今泉 2012: 2)、時間における事態の位置づけを扱っている。ここで時空モデルを簡単に説明しておく。時空モデルの詳細については、今泉(2003:70-78, 2012:117-160)を参照されたい。時空モデルは、図8のように表示されている。

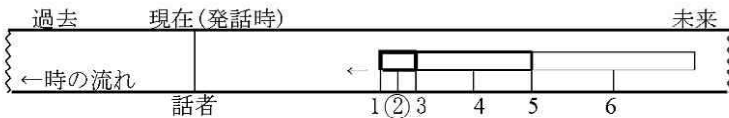


図8 時空モデルの一例 ((18) の時空モデル) (今泉 2012: 145)

時空モデルでは、川の流れのように、時間が未来から話者の立っている現在を経て、過去へと流れていく。時間の流れに乗った事態は、川の上に浮かんでいる舟のように、未来から現在に近づいてきて、そばを通り過ぎ、過去へと運ばれていく。

時空モデルは、主として事態のテンス，アスペクト的な意味を示している。テンス的な意味は，事態の舟の位置で示されている。舟が話者の右側にあれば，事態が未来にあり，舟が話者の立っているところにあれば，事態が現在に進行しており，舟が話者の左側にあれば，事態が過去になっている。アスペクト的な意味は，事態の舟に書いてある数字で示されている。数字1が開始を，2が進行中を，3が完了／進行完了を，4が結果状態継続を，5が結果状態継続完了を，6が結果記憶を示している。

以下，時空モデルの具体例を見ていく。

(18) 明日の14時ごろ，彼は図書館で本を読んでいる。

(18) の事態がテンスとしては未来，アスペクトとしては進行中であるので，図8は，そのまま (18) の時空モデルを表示することができる。この時空モデルでは，未来は，事態の舟が話者の右側にあることで示されており，進行中は，○のついた数字2で示されている。

(19) 昨日の14時ごろ，彼は図書館で本を読んでいた。

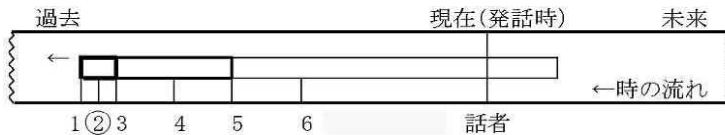


図9 (19) の時空モデル (今泉 2012: 147)

(19) の事態が過去の進行中であるので，図9は，(19) の時空モデルとなっている。この時空モデルでは，過去は，事態の舟が話者の左側にあることで示されている。進行中は，○のついた数字2で示されている。

3.3 日本語構造伝達文法に基づく新しい図示法

3.3.1 構造モデルの位置づけ

人間の脳は，鏡のように実際の世界を映すのではなく，認知というフィルターを通してアレンジされた世界を映している。アレンジされた世界は，文の意味の元となっている。

日本語構造伝達文法の構造モデルは，主として文の意味構造を示しており，文の意味構造の立体的な再現であり，アレンジされた世界の投影でもある。最終的には，構造モデルは，認知と関連づけられる。こうした流れでの構造モデルの位置づけは，図

10のようになるであろう。

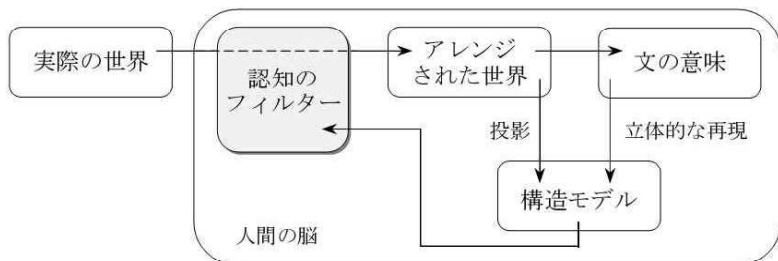


図10 構造モデルの位置づけ (本論文筆者・蒋家義による理解)

3.3.2 構造モデルに基づく新しい図示法

さて、深層格や表層格、「主題－解説」構造を具現化する図示法が望ましいと述べたが、3.2.1節の検討から分かるように、構造モデルは、深層格、表層格、「主題－解説」構造を含めて、文の意味構造を示すことができる。したがって、構造モデルに基づく新しい図示法は、以上の条件を満たすと考えられる。

新しい図示法は図6と図7のような日本語構造伝達文法の構造モデルを取り入れるが、それを中国語に適用するには、次のような説明と「アレンジ」を加える必要がある。

- ①属性は、述語としての動詞や形容詞の表す事態(動作または状態)に相当している。
- ②主体は、事態の成立に必須の実体である。
- ③すべての事態に客体が現れるわけではないので、客体は、事態の成立に必須・非必須の実体である。
- ④事態の成立に必須の実体が2つ以上ある場合、最も重要な、または認識されやすい実体は、主体となっている。
- ⑤属性、主体、客体は、それぞれ1つのまとまりとして認識されているが、補助属性は、属性、主体、客体などに関する別個の情報(ヴォイス、テンス、アスペクト、肯否、丁寧度など)である。
- ⑥属性、補助属性の名称の表記をローマ字から漢字に変える。
- ⑦用語「属性」と「補助属性」をそれぞれ「事態」と「補助事態」に置き換える。
- ⑧深層格は、述語の表す事態において主体や客体が担う役割と規定しなおす。
- ⑨深層格の名称の表記を「が」、「を」、「で」、「に」のような表層格から「動作主」、「対象」、「手段」、「着点」のような深層格そのものの名称に変える。

4 本論文のねらいと考察対象

構造モデルに基づく新しい図示法を使って中国語の句の意味構造を考察しながら、日本語構造伝達文法の中国語への適用を試みるのが本論文のねらいである。

中国語では、単語と単語とが結合して句を構成する際の文法規則は、句とほかの語句とが結合して文を構成する際の文法規則とほぼ同じである。しかも、中国語の句は、ほかの語句と結合して文になることができるし、単独で独立して文になることもできるので、文の土台であると考えられる。つまり、句の構造の考察によって、文の構造も明らかになるはずである。したがって、本論文では、句に注目して論じる。

句を構成する単語間の関係によって、中国語の句は、だいたい次の7タイプ¹に分かれる。そのうち、(3)述補句、(4)述目句、(5)主述句が本論文の考察対象となる。(3)述補句は第4章で扱い、(4)述目句は第3章で、(5)主述句は第2章で扱う。

- (1) “联合短语” (連合句: 2つ以上の単語が対等の関係にある)

工人	农民	你	和	我		
労働者	農民	(労働者農民)	君	と	僕	(君と僕)

- (2) “偏正短语” (主従句: 連体修飾語と被修飾語、または連用修飾語と被修飾語の関係にある)

新	书	非常	漂亮		
新しい	本	(新しい本)	非常に	きれいだ	(非常にきれいだ)

- (3) “述补短语” (述補句: 述語と補語の関係にある)……[第4章]

洗	干净	走	得快			
洗う	きれいだ	(きれいに洗う)	歩く	補語標識	速い	(速く歩く)

- (4) “述宾短语” (述目句: 述語と目的語の関係にある)……[第3章]

吃	饭	去	中国		
食べる	ご飯	(ご飯を食べる)	行く	中国	(中国に行く)

- (5) “主谓短语” (主述句: 主語と述語部分の関係にある)……[第2章]

身体	健康	他	北京人		
体	健康だ	(体が健康だ)	彼	北京の人	(彼は[本籍が]北京の人だ)

- (6) “连动短语” (連動句: 連続した動詞や動詞句が同じ主語を持っているという関係にある)

站	着	看	打	电话	通知	他		
立っ	ている	見る	(立ったまま見る)	掛ける	電話	知らせる	彼	(電話を掛けて彼に知らせる)

- (7) “兼语短语”² (兼語句: 前の述目句の目的語が後ろの主述句の主語を兼ねているという関係にある)

请	他	写	信	喜欢	他	认真
頼む	彼	書く	手紙	好きだ	彼	誠実だ
(彼に頼んで手紙を書いてもらう)				(彼の誠実さが好きだ)		

1 それぞれの例と日本語訳は、鳥井 (2008) による。

2 (7)“兼语短语”は、句と句とが結合して構成された複雑な句である。